

## 【アメリカ事情】

「どんな政府でもいい、問題はデモだ」と  
ハワード・ジンは言う

室 謙 一

だいたい気分が悪いのです。しかしそんなことから書き始めるのも、気分が悪いのだが仕方がない。

朝起きて、台所で朝食をたべながら新聞を読むでしょ。ぼくの場合は、女房が広げている『サンフランシスコ・クロニクル』の適当なページを横から抜き取ってとって読むのですが、あとは彼女がこんな記事があるわよ、と話してくれるのです。自分でスキヤンするのではなくて、人がスキヤンしてくれる。だけどこのごろは、愉快な話なんかはない。いったいどうなっているの、参ったな、という感嘆符をつけながら、新聞を読んで、朝の会話をするわけです。

こういうように新聞を読みながらの、いったい全体、世の中はどうなっているか、無茶苦茶ではないか、という会話は、日本の友人の朝食のテーブルでも行なわれているだろうし、また数日前のパリの友人からのメールによれば、そこでも同じような会話だそうです。

## ▽新聞はもう読まないぞ△

だから新聞はもう読まないぞ、と決めたのだけど根性がないからそうもいかない。もつともテレビのニュースはも見ません。9・11以来、何か特別のことがない限り、見ないことにした。

いま東京だけど、この間、空港で久しぶりにブッシュをCNNニュースで見たら、自信のない犬のような顔をして（犬への差別ではないよ）、たどたどしい英語は同じだが、ちよつとやつれているではないか。これだけ支持率がさがれば、やつれるかもしれない。サンフランシスコを発売前に読んだ『クロニクル』紙のブッシュ支持率の記事によれば、カリフォルニア州におけるブッシュの支持率は、三十三パーセント。民主党支持者のブッシュ支持率が下がるのは当たり前だけど、共和党支持者のブッシュ支持率も下がっている。これ以外の他の調査も、のきなみ全国的なブッシュ支持率の低下を報告している。もつともカリフォルニア州ほど

ではないけどね。いま選挙をやったら、ブッシュは確実に負ける。

しかしながら、問題はその先にあるのです。ブッシュの支持率が下がっても、ブッシュが自信のない犬の顔をしてやつれても、彼は政策を変えるつもりなど、ないのです。スタッフの責任を追究するつもりなどもないのです。その理想主義とやらを振りかざしたままなのです。

昨日、兄さんと電話で話したら、お前ね、アメリカはまだいいよ、ブッシュの支持率が下がっているのだから、日本は小泉の支持率はいかかわらず高いのだよ、信じられるか、と言うのですが、支持率が高いか低いかは、根本的な問題ではないよ、支持率が低くても、ひどい政府がいかわらず権力を行使していて、方向転換する気配もなく、その必要を彼ら彼女らが感じていない、のだから。つまり支持率なんて、数字だけで、そんなことで下がったからいい、とは言っていられない。と話をしました。

## ▽どんな政府でもよろしい△

何か月前、パークレーの書店でハワード・ジンの『You Can't Be Neutral on a Moving Train』と『DVID』を見つけた。ジンの自伝（たしか同名だったと思

うけど(注1)をもとに作ったDVDです。なかなか面白いよ。

その最後の方で、ジンがニューヨークで大デモの集会で演説する。私の記憶では、そこでジンはこんなことを言う。

「私たちが、どんな政府をもっているか、ということは根本的な問題ではない。それが共和党であるか、民主党であるかは、問題ではない。どんな人間がそこにいるかも問題ではない。重要なことは、このようなデモが、このような集会があつて、それがどんな政府であつても間違つた政策を実行させないこと、ただし政策を実行させるようにさせることが、重要なのだ。われわれが運動を持ち、デモを持ち集会を持ち、政府に勝手なことをさせないということが重要なのです」というようなことを言う。参加者はワーと拍手するわけです。何年も前のデモの演説だと思ふけど、私もDVDを見ていて、拍手しましたよ。この演説の正しさは、いまだはいよいよ痛切なものです。支持率が下がつたつて、平気のへいざなのです。もしいま大きな運動があり、集会和デモがホワイトハウスを取り囲んだとしたら、それこそが政策を変えさせる契機となるので、支持率が本当の問題ではないのです。支持率が低いからいいと言われても、言葉に詰まるばかり。しかしこの言葉に感動するのは、これ

が急に出てきたものではなくてジンの十代から運動参加、軍での経験、そこから苦勞して大学でまなび、博士号をとつて南部の黒人大学の歴史学の教授となり、同時に公民権運動に参加して、『SNCC』(注2)などを書き、大学をクビになり、ボストン大学の教授になつて、本を書きながら、運動の先頭にもたち、そのためにまたクビになり、というようなDVDのストーリーの最後の方に、結局、重要なものは運動だよ、集会だよ、デモだよ、とこの老人が(老人には見えないが)(注3)言うので感動的なのです。それとこのDVDの中に、一枚だけ日本での写真があります。横断幕をひろげてデモをしているところ。ジンの横に片桐ユズルがいるから、彼が通訳だったのだろう。ひよつとしたら、その写真のデモの中にぼくがいたかもしれない。ぼくは九段会館でのジンの講演会に行つて、そのあとのデモ(注4)にも参加した。それがぼくの最初のデモで、二十歳だったのです。

### ▼アメリカのデモは△

ただアメリカでは、ときどき大きなデモがあるでしょ。それにイラクで戦死した兵士の母の運動も、すごいじゃない、と言われることがある。でもそこで暮らしている、ことはそんなに簡単ではないよ、と思う。

イラクで戦死した兵士の母の運動は、迫力があり、いわゆる保守層の中に亀裂が走つて行くのが見える。(さっきカリフォルニアの女房に電話したら、彼女(注5)は昨日また逮捕されたとか。)ともかくこれは、共和党支持者の中でのブッシュ支持層の低下とともに、大きなことです。ぼくは結論から言えば、そういう保守層とともに歩まないといけないと思う。

それとまた若い世代のなかには、明らかに反戦がある。なかなか気持ちのいい形で。

イラク戦争の前のサンフランシスコの数回の大デモのときに、どれだけ多くの若い世代のカップルが、赤ん坊とか小さな子供たちと家族の単位で参加していたことか。

ところがその大集会のときの演壇の演説と、その若い人たちの間には、あきらかに断絶があつた。それらの演説は、これまでの政治言語で、パレスチナを語り、テロリズムを語り、女性差別を語り、それをまったくと言つていいほど、若い人びとは聞いていない。若い人たちは自分たちで話をしていて、その上を政治的な言葉が飛んで行く。多くの人が、会場の広場で演説をまったく聞かずに、携帯電話で友人たち家族たちに、その集会の報告——それは政治的な言語ではなくて——をしていった。しかし彼女たち彼たち

は、集会和デモを楽しんでいたことは間違いない。それらの多くのカップルにおいて、はじめての「政治集会」であった。

いまから一カ月ほど前に、ふたたびサンフランシスコで集会和デモが組織されて、それはワシントンDCでも、ニューヨークでもサンフランシスコでも行なわれた。ぼくは行けなかったのだけど、そこに赤ん坊を連れて行った若いカップルに話を聞いたら、たくさん人が集まったということ、何万の単位であつたらしい、楽しかったこと、戦争を止めるまで続けて行きたいとのこと。それで演説はどうだったか、と聞いたら、全然おもしろくない、誰も聞いていなかったわよ、ということであつた。これは、私が他のイラク戦争反対の大デモに参加したときの感想とも、また女房の仕事の関係でわが家を訪れる他の若いカップルに聞いた話とも一致します。

### ▽意見の相違があることは当たり前だ△

今回の大デモの前の日の『クロニクル』紙に、大デモの実行委員会内での議論についての、長文の記事が出ていた。この何年間か、アメリカでの全国規模の集会和デモの呼びかけは、いつも International Answer という運動が中心になっている。この運動は、私の考えによれば、パレスチナ寄りの政治路線が強くて、

イラク戦争が始まる前の大デモのときも、演壇で話をする人の人選が一方的だから（反ユダヤ主義的だから）、参加したくない、というユダヤ人インテリたちがいたぐらゐ。今回は、その記事によれば、実行委員会の中で、Answer がパレスチナ寄りの政治路線をまた強く押し出そうとして、もめたらしい。もつと穏やかな線で見んが入れようかなと作るべきだ、という派との対立で、分裂するのはないか、というところまで進み、結局は、この実行委員会には政治的な立場がそれぞれ違うグループの集まりである、という文書に署名して、それで分裂の危機を乗り切つたというのだった。どうも実行委員会というものの原理をわきまえていない人が、自分たちの路線を強引にすすめるようにしているように思える。政治的な立場、思想が違つても、思想のある一点で集まり、場所と行動をとるにすると、というのは当然のこと、どうも当然のことが当然とされていらないらしい。

そういう形で組織された集会和デモに、若い人びと、それにラディカルな政治思想を持つていない人びとが参加して、違和感を覚えるということがいま起こっていることです。しかし違和感を覚えても、それをものともしない、明るい反戦があることは確か、プラカードとか横断幕

があまりに露骨な政治路線で、ぼくとか女房なんかは嫌になることもあるけど、若い人たちは分らないかもしれない。組織の側は、動員の対象として、若いカップルを政治的に未熟な人びとと見ている、あるいは保守層を取り込むだけの対象としか見ていないように思える。ぼくの考えによると利用主義なのです。

### ▽気分の問題にもどると△

こんな風を書いてくると、いよいよ気分が悪くなってくる。支持率は下がつても、ブッシュは平気で、ハワード・ジンが集会和デモの力が民主主義の根底である、と言つても、その集会和デモは、政治的利用主義がひっぱろうとしている。だけどときどきやる集會には、ひとが集まつてくることは確か、そこには可能性がある。若いカップルとか戦死した兵士の母の運動には、あきらかに新しい質があります。

たしかに気分が悪い。だけど本当のことを言うと、気分が悪いことにもあきてきた。友人たちに電話をして、話をすると、みんな絶望的な気分になっている。ちよつと集まつて話をしない、と言つても、集まつて話をしても、しょうがないよ、という気分ですね。十二月には大きなデモがあるらしいから、それに向かっ

### 【37ページ下段に続く】

告も)。二〇〇六年も心より期待しています。ご苦勞様です。

【編集部から】意見広告運動が終了したとき、広告の新聞紙面のコピーを賛同者の方全員にお送りしています。すでに持っているから無駄だ、お金がもったいない、というご批判も来ていますが、こういう利用をされている方も多数おられます。「無駄」とおっしゃらずに、活用法を工夫してくださいれば嬉しいです。

### ■首相の靖国参拝に抗議

豊中市 萩 ルイ子

十月十七日（秋季例大祭の初日）、小泉首相は靖国神社を参拝しました。五年連続、五度目の参拝。大阪高裁の判決などに見られるように、首相の靖国神社参拝は、憲法第二十条三項（政教分離の原則）に違反しています。

「靖国神社は、大日本帝国の軍国主義の支柱であった」（高橋哲哉『靖国問題』）です。A級戦犯が合祀されている靖国に、首相が参拝することは、国際的にはかつての侵略戦争・対米戦争を全く反省していないことを示すものです。国内的には、アジア諸国との友好を心から願う市民の感情・行動を踏みにじるものであり、怒りを覚えます。これに関して、九月十一日の総選挙で自民党を圧勝させた、マスメディアの責任は重大です。

（一部、字句を変更しました。編集部）

### 事務局からのお願い

#### ○会費（『ニュース』代）納入について

会費は一般会費が年二五〇〇円（65歳以上の方と障害者、長期療養者の方は二〇〇〇円）です。このほかに、とくに会を財政的に支える年五〇〇〇円の「協力会員」の制度もあります。

会費の前納は大歓迎なのですが、それは二年分までとします。それ以上長期の前納はご遠慮ください。理由は、もっぱら事務局の精神的負担を軽くしてほしいということです。

『ニュース』の封筒の宛名ラベルの下に「2006/01」などあるのが、頂いている会費の期限です。期限が来ると、『ニュース』には「会費納入のお願い」という文書が同封されます。その際はぜひ、早めに「ご送金ください。万一退会のご意思がある場合は、ぜひFAXなりハガキなりでその旨を早めにお知らせください。」

#### ○意見広告賛同金の送金について

意見広告の賛同金を市民の意見30の会の振替用紙で送る場合は、必ず、紙面への氏名掲載の可否をお知らせください。

#### ○振替用紙の通信欄にぜひ「意見を

ご送金の振替用紙には、ぜひ一言、ご意見なり、感想なりをお書きください。『ニュース』の「読者からのお便り」欄に掲載させていただきます。この欄はまず最初に読まれるページの一つです。

【29ページより続く。「アメリカ事情」】  
てさあ、という訳で、目下、電話をしたり、メールを送ったりしている。国際電話で、話をするとか向こうもローカルで話をする時より、まじめに話をするような気がする。へえ、東京から電話しているのか、ということだね。実際は国際電話なんて安いもの。

こうなったら何とかして、自分の気分をよくしないとイケない。これは、ベトナム戦争のころとは比べられないとしても、あのときよりずっと悪いぞ。ジン先生の言う通り、あるいは寺山修司の言う通り、「街へ」なのです。ぼくもあと数週間で還暦なのだし、孫もいる。たいそうな政治思想はやめにして、何を孫にのこせるか、というところでやりたい。歳をとったと笑わないでほしい。真面目なのですよ。

（むろ・けんじ、サンフランシスコ在住、『本とコンピュータ』編集長）

#### 編集部注（1）邦訳は『アメリカ同時代史』

田中和恵ほか訳 明石書店 97年刊 （2）

邦訳は『反権力の世代』武藤一羊訳 合同出版

67年刊 （3）ジンは1923年生まれ

現在82歳。（4）1966年夏、東京で開か

れたベ平連主催の「ベトナムに平和を！日米

市民会議」のデモ。（5）昨年、息子がイラン

で戦死し、夏以来、反戦運動を続けるシンデ

イ・シーハンさん。